

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(20)：

## 「英語」に嫌われても「人」に愛されればよい～海外赴任を乗り切る秘訣～

<http://eetimes.jp/ee/articles/1309/19/news012.html>

さて、本連載も佳境にさしかかりました。今回は、ついに海外赴任へと旅立ちます。海外出張と決定的に異なるのは、生活するための基盤を自分で立ち上げなくてはいけないこと。銀行口座の開設に始まり、アパートを契約したり、電話、水道、ガス、インターネットを引いたりするための交渉を続けるうちに、私が学校で学んだ英語は大きく崩壊していきました。実践編(海外赴任)となる今回は、私が赴任を通して学んだ秘訣を紹介します。

2013年09月19日 07時30分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

米国の有名なコンピュータ関連企業と私の勤務している会社が、新しいネットワーク管理ソフトウェアの開発を行うため、私たち家族が米国コロラド州に赴任することになった時のことです。

それを聞いた父と母は、「何月何日に日本を発つのだ?」と、何度も尋ねてきました。

「なんでそんなこと知りたいの?」と尋ねてみたら、

——成田空港に「見送り」に行かなければならないだろうが

と言われて、腰が抜けるほどビックリしてしまいました。

「お願いだから、来ないでね」と、相当何度も言い含めて思いとどませたのですが、あの両親は、「祝 江端智一君! 米国赴任おめでとう!」と書かれた横断幕を抱え、親戚一同を引き連れて成田空港に乗りこんできていたかもしれない、と思うと、今でも血の気が引く思いです。

太平洋戦争前に生まれ、青春時代を戦火の中で過ごした私の両親にとって、「息子の米国赴任」というのは、それはもう「エリートオブエリートズ」、会社の若手幹部候補生、社長の椅



子ロックオンーのように思えたのかもしれませんが。

実際、戦後の高度成長期において、アメリカ合衆国とは富の象徴であり、文化や技術において日本人の目指すべきまばゆい指標であったことは事実です。英語新聞を読んでいる人は別世界の人間で、英語がしゃべれることは、永遠の安定と栄光を保証された(という誤解と錯覚が存在した)時代があったのです。

今でも、日本人のその古い思い込みは色濃く残っています。例えば、いわゆるトレンディドラマにおいて、才能はあるのに優しさ故にうだつの上がらない男が、最後に仕事で成功して、ニューヨークの五番街で彼女と一緒にショッピングをしているところでエンディングを迎える——という陳腐な設定は、今なお健在です。

しかし、時代は変わりました。

海外赴任は、もはや特別なイベントではありません。私のような「英語に愛されないエンジニア」まで現地に送り込まなければならないほどに、——誰もグローバル化なんか望んでいないのに\*1)——我が国の企業は、海外市場に生き残りを見いだすしかないのです。

\*1)「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(18): [誰も望んでいない“グローバル化”、それでもエンジニアが海外に送り込まれる理由とは?](#)

ともあれ、私の父や母が、自分の息子のことを真逆の方向に誤解していたとしても、「まあ、いいかな」と思っています。

「バーチャルアイドル 初音ミク」\*2)よりも、さらに斜め上に行く「バーチャルエンジニア 江端智一」の存在が両親を喜ばせているのであれば、それをわざわざ訂正する必要もなかりうと、そのまま放置して現在に至っています。

\*2) [初音ミクを生んだ“革命的”技術を徹底解剖!ミクミクダンス、音声、作曲…](#)

5秒で海外赴任を承諾

さて、私を海外赴任させる立場であった上司も、いろいろ考えていたように思えます。海外出張とは異なり、海外赴任ともなれば、本人の同意なく業務命令を行うことはできないでしょう。

赴任開始予定日からさかのぼること3カ月、上司より、海外の会社と共同プロジェクトを行う話を正式に打診されました。

その場の勢いだけでこれまでのエンジニア人生を生きてきた私ですが、その当時、結婚して長女も生まれていました。そのような話を、おいそれと受けることができるわけありません。

江端:「海外赴任ですか……。妻とも相談しなければなりません。少しだけ、考える時間を頂いてもよろしいでしょうか」

上司:「江端君、コロラドには、あの『アスペン』があるんだよ」

江端:「行きます」

上司:「江端君。奥さん……」

江端:「問題ありません。『アスペン』です」(意味不明)

上司の説得は、5秒で完了しました。

スキーフリークであった私に、世界で最も有名なスキーリゾートの名前を出して、見事に丸め込んだ上司の戦略勝ちです。「君のためになる」とか「キャリアアップ」という凡庸なセリフで私をムツとさせることもなく、数秒でケリをつけた上司の機転の利いた説得に、今回も「また、やられた」という気持ちになりました。



画像はイメージです

さて、こうなると、今度は私が嫁さんを説得しなければなりません。

まだ1歳の幼児を抱えて、在米日本人の存在が確認できていない(当時、本当に分からなかった)、聞いたこともない「フォートコリンズ」という街に、一緒に来てくれるだろうか。

同僚には、本当にこの赴任を心配している者がいました。

「江端さん、およしなさいって。病気になった時や事故に遭った時、本当に対応できると思っ  
ているのですか」

このようにはっきり言われると、私も少しずつ不安になってきました。確かにむちゃだったかもしれない。これまでの一人旅や海外出張とは次元が違う。嫁さんと、きちっと話を  
して、場合によっては単身赴任も考えなければ。

そのように考えをまとめてから、私は意を決して嫁さんに電話しました。

嫁さん:「え!決まったの? どこどこ? いつから? どの位の期間? えっ、何? 『本当に行くのか』  
って何の話?」

説得の必要もありませんでした。フットワークの軽い(そして、私よりは「英語に愛されている」  
ように見える)嫁さんと結婚して、本当に良かったと思った瞬間でした。

『大丈夫だ。私一人ならダメかもしれないけど、嫁さんと二人なら、どんな状態になろうとなん  
とかなるわい! どこに行ったって、全て“日本語”で押し通してくれるわ! わーはっはっ!!』

と、陽気な気持ちになってきました。

さて、最後の仕事は部下(後輩)の説得です。

今回の海外赴任は、私がメンター（指導員）をしていた後輩とセットの話であり、実は彼にとって、今回の海外赴任が人生最初の海外渡航になるといういわく付きでした。

彼が、私に気兼ねして正直な気持ちを言えないまま、赴任に付き合わせるようなことになったら、メンター失格です。

ですから、私は慎重の上にも慎重に彼に尋ねました。

江端：「いいか。嫌なら正直に言ってくれ。会社を敵に回しても、必ずこの話を『つぶしてみせる』から、絶対に遠慮するな」

後輩：「えーとですね、江端さん。私、『行きたい』です」

江端：「うん、そうだろう。やっぱり、最初の海外がいきなり赴任というのはキツイ……え？ 今、『行きたい』って言った？」

後輩：「言いました」

江端：「なんで？」

後輩：「なんで、と言われましても」

江端：「もう、『取り消し』きかないよ」

後輩：「いいですよ」

少し、過剰に心配しすぎたかなーとも思いましたし、正直、彼が何を考えていたのか\*3)、よく分かりませんでした。本人が『行きたい』と言うのであれば、是非ありません。

\*3) 後輩談：初めての海外が赴任というのは正直きついけど、受け身な性格の私のこと、自分からアピールして海外赴任を希望することなんてないだろう。この機会を逃したらもうチャンスはない。今「行く」と言わずしていつ言うのか、と考えていました。

よし！ いっちょ、海外でがんばってみるか！

と、天を仰ぐと……、一面に黒雲が漂い、今にも大雨や大雪が降りそうな、私の決意とは真逆の、実に不吉な空模様だったことを覚えています。

予感は当たりました。赴任の話が全然進まないのです。

まず赴任日がなかなか確定しませんでした。たぶん契約や受入体制の手続きや処理が滞っていたのだと思うのですが、いったい、いつ頃出発できるのかもおぼつかない状況でした。

ようやく、出発日が決まったかと思ったら、今度は、社内の部署に依頼していたビザの発給手続きでゴタゴタしている。製品計画は既に線表に乗っているのに、出発させてもらえない――。これは、結構なストレスでした。その部署の担当者に電話をしても、なんだか他人ごとのようで、進捗状況がまったく把握できない。

「あの部署は、何やっていやがるんだ！」と悪態をついていたら、上司に叱られました。

上司:「いったい、君は、あの部署に何を期待しているのだ？」  
江端:「何をって……そりゃ、海外赴任に関する手続きです」  
上司:「渡航するのは君だろう？ なぜ、他人を当てにするのだ？」  
江端:「私に、ビザや渡航関係の手続きができるわけがないですよ」  
上司:「困っているのは『君』だけだ。あの『部署』が困っているわけではない。自分自身でアメリカ大使館に乗り込んで、ビザを奪ってくるくらいのはしろ」

当時の私には暴論のようにも思えましたが、実は、これが、海外赴任に赴く私への、上司からの「贈る言葉」であったことには、随分後になって気が付きました。

米国において「暗黙の了解という概念はない」「要求は、それが通るまで、何度でも行動で繰り返す必要がある」、つまり「『自分のこと』は全て『自分のこと』」という、海外生活の初歩の初歩が、その叱責の中には含まれていたと思うのです。

まあ、そんなこんなで、すったもんだしながら、会社の各事業部から選ばれた、7人の従業員（その内一人は、完璧な英語を駆使するリエゾンを兼務）と、その家族から構成される、チーム“Samurai”が、ようやくコロラドに結集するに至りました。2000年4月のことです。

海外出張と海外赴任の決定的な違いとは？

海外赴任が、海外出張と決定的に異なる点があるとすれば、それは、自分の力で生活インフラを立ち上げなければならないことです。

赴任先にいけば、広いマンションが準備されており、水道、ガス、電話が既に利用可能となっている——というような話は「幻想」です（少なくとも、私の周りでは聞いたことがありません）。

コロラド州に到着した時の私の心象風景を、どのように表現したら良いでしょうか。

東西南北どちらを向いても地平線しか見えないコロラドの原野に、ポツンと独り取り残され、沈んでいく夕日をただ見守る……、というような、空前絶後の不安感。

赴任先の近くのモーターに一時的に拠点を構えて、ここから、インフラを立ち上げるための、私のたった一人の闘いが始まります。

アパート、銀行口座、水道、電気、ガス、電話、携帯電話、インターネット、これらの契約とその交渉を、全部私一人で行うことになりました。その当時は1歳の長女を抱えていたので、嫁さんと長女は、インフラ立ち上げの後でコロラド入りすることになっていたからです。

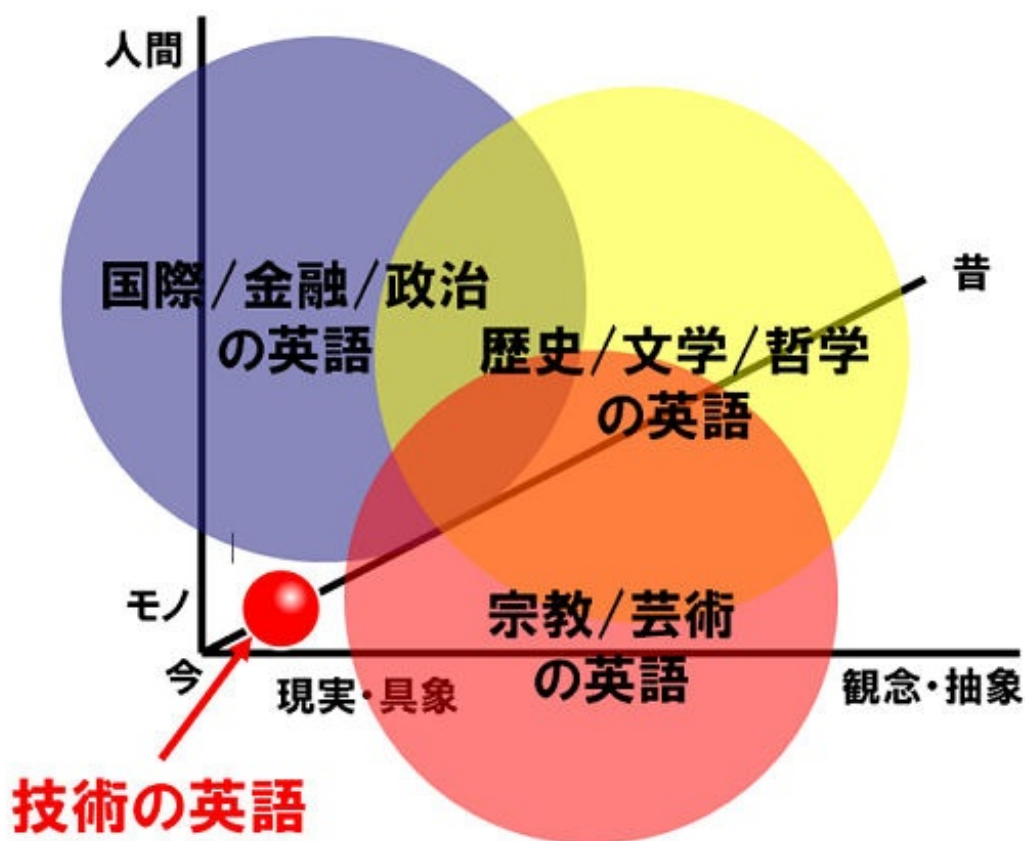
これらの生活インフラの立ち上げは、どれもこれも、思い出したら涙なくしては語れない失敗と後悔の連続でありましたが、その中でも特に、今でも記憶にはっきり残っている壮絶な闘いは「銀行口座の開設」でした。

当然のことながら、銀行口座がなければ給料や各種の支払いが成立しません。

銀行に行く前の夜は、泊まっているモーテルで深夜に至るまで、口座開設のシミュレーションをさまざまなパターンで行いました。

「そんな質問される訳ない」と思えるような質問 —— 例えば、中学生の時の得意科目とか、嫁さんへのプロポーズの言葉とか、我が国の平和憲法の意義と趣旨、に至るまで —— 今となっては、「お前は阿呆か」と言われても仕方ない状況までも想定して、脳内でシミュレーションを実施していました。

それに、「仕事で使う英語ではない」ということは、技術英語の範囲を超えなければならないということでした。英語に対する私のプレッシャーは、この時、極限に達していたのです。



技術英語が対象とする範囲は非常に狭い

しかし、この一見「阿呆らしい」シミュレーションこそが、「360度、全方面向け英語」への転換の準備となり、後の生活に必要な英語のフレーズとして定着することになりました。

□

銀行で私の担当になった20代後半くらいの若いお姉さんは、本当に親切でした。

銀行口座におけるキャッシュフローを鉛筆で図示し、小切手の取り扱い方を実例で教えてくれて、Checking accountとSavings accountの違いを説明してくれました。

しかし、その会話の中には、当然、私には未知の単語が山ほどありましたし、そして、今回ばかりは「分からないまま、放置する」ということが許されなかったので、私も徹底的に食い下がりました。



画像はイメージです

そして、常識的な対応をはるかに超えた時間の後に、ようやく口座開設に至りました。

お姉さんも私も、疲労の極限に達して放心状態となり、かすかに肩で息をしているのが見てとれました。

(ついに、やりましたね。日本から来られた「英語に不自由な」お客さん)  
(ええ、やり遂げましたとも。こんな顧客に当たって「本当に運の悪い」銀行のお姉さん)

私たちはハグこそしなかったものの、熱い何かが構築されたことを確信しました。そして、私はこの銀行のお姉さんと、米国に赴任して最初の固い握手を交わしたのです。

「英語」に愛されなくても……

この口座開設以後、多くの生活インフラ立ち上げに関わる交渉を経ることで、私がこれまで習ってきた英語は劇的な崩壊を始めます。

ひと言でいうと「学校で習ってきた英語のルールを、全て忘れた」ということです。

接続詞の“When”で2つの節をつないだ英文なんぞ、1回も使わなかったし、聞いたこともない。

時制なんぞ、過去形にするか、動詞の原型にwillを付けるだけで、現在完了形などついで登場しなかったし、だいたい、自動詞と他動詞を使い分けたことすらない。

全部の動詞を、I(私)を主語とする他動詞として使っていました(例:「私は、この契約書の内容に混乱しています」と言いたいのを、“I confuse the contract”「私はその契約書を混乱させました」と言っていた)し、Don't youで始まる英語に、“Yes, I don't”「はい、違います」などと、平気でしゃべっていました。

このように、学校で習ってきた英語のルールをことごとく無視しても、私は、銀行口座の開設

からアパート、水道、電気、ガス、電話、携帯電話、インターネットの契約まで、全部完了することができました(ただし、ひと月もかかりましたし、チームにも随分助けてもらいましたが)。

つまり「英語」になんか愛されなくても、目の前の「人間」に愛してもらえば良いのです。

私は、

- 嫁さんにも見せたことのないような「笑顔」と、
- 上司にすら示したことのない「謙虚さ」と、
- 私自身ですら見たこともない「誠実さ」\*4)の

3点セットだけで、「絶望的にひどい英語をしゃべる、異国の地からやってきた気の毒なアジア人」を見事に演じきり、そして、そのような私にコロラドの人々はとても優しくったのです。

\*4) [若きエンジニアへのエール～入社後5年間を生き残る、戦略としての「誠実」～](#)

□

では、今回の海外赴任に関してまとめてみたいと思います。

- (1) 今なお、海外赴任の中でも、特に米国赴任に対する「エリート幻想」は存在する。しかし、その幻想で幸せになれる人がいるなら、放置しておいてもよい
- (2) 海外赴任に関する最終判断は、本人に任せるしかない。こればかりはコントロールできない。あまりいろいろ考えても仕方がない
- (3) 「誰かがなんとかしてくれる」「そのうち、なんとかなる」という願望は日本に捨てていく。海外の生活では、「『自分のこと』は全て『自分のこと』」という現実が待っている
- (4) 英語に愛されないエンジニアが、海外で生活するには、「英語」に愛される必要はない。「人間」に愛してもらうように(または、そう見えるように)努力することで、なんとかなる(場合もある)

□

では、今回は、ちょっと普通のリポートではみられない、本音ベースの「英語に愛されないエンジニア」の海外赴任生活の実体について報告したいと思います。

NHKラジオ・テレビの語学番組に登場するような、理知的で、誠実で、ユーモアと、決断力にあふれる米国人は実在するのか。それは「バーチャルアイドル 初音ミク」と同様の「バーチャルパーソナリティ 米国人」ではないのか ―― という観点から、私の米国赴任生活をレビューしてみたいと思います(EE Times編集部からお許しをいただければ\*5)。

\*5) 編集注: どうぞどうぞ

---

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。





## Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi\\_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

## 関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

